

Fabio Luisi & Opernhaus Zürich

FL ファビオ・ルイージ & チューリヒ歌劇場

取材・文中 東生
Text: Shinobu Nishi

9月23日、総裁アンドレアス・ホモキ、音楽総監督ファビオ・ルイージの新体制でチューリヒ歌劇場のシーズンが開幕した。前総裁のペレイラ氏のカラーとは全く違う演目が並ぶ年間プログラムで失望感が隠せないチューリヒのオペラ界だったが、この《イエヌーフア》で、これからチューリヒ歌劇場が進んでいく方向が提示され、承認されたと言える初日だった。

チューリヒの進む方向が 提示され、承認された開幕

常に起きうる出来事として表現したい」という演出家ドミトリー・チエルニャコフの意図とマッチして効果的であった。

幕が開くとモダンな家の1、2階が同時に見える舞台装置となっており、終幕には3階も使われ、家全体を上下させるだけで舞台転換の必要もない素晴らしい舞台美術も、演出家が担当している。その舞台上に自然に存在している歌手陣がまた全員素晴らしい。現代のティーンエイジャーの代表のようなクリスティーン・オボライスの題名役、継母の愛情を細部まで表現したミカエラ・マーテンス、ブリヤ家のおばあさん役ハンナ・

シュヴァルツ、軽い色男のシユテヴァ役バヴォル・プレスリクとラツア役クリストファー・ヴェントリス以下端役までが完璧に性格描写と音楽性を両立させているのは、演出家と指揮者両方の非凡な才能がもたらした成功といえよう。

幕切れではイエヌーフアがラツアの求愛も拒んでドアから閉め出し、継母の顔を愛撫すると思わせで罵倒する結末で、狐につままれたような感覚が否めないが、誰にも頼らず生きることのできる現代女性の強さを表現しているのだから。

新しいチューリヒ歌劇場から目が離せなくなってきた。



《イエヌーフア》から。題名役クリスティーン・オボライス(左下)と継母ミカエラ・マーテンス ©Monika Rittershaus